

片 多 順

(福岡大学)

人は誰でも高齢化するにつれて様々な変化を経験することになります。瞬発力の衰えのような身体的変化、ホルモンバランスなどの生理的变化、役割の喪失、収入減、そして社会関係の変化など、その内容は多種多様でしょう。

そのような変化を受け止め、新しい状況に自己を適応させ、自立を確保し、子供など周りの人々からの介護や扶養を約束させるには、どうしたらいいでしょうか。どの文化でも高齢者たちは、これまでの長い人生で培ってきた様々な *resources* (知識、技術、経験、財産、人間関係などの手段) を最大限に利用して、老後生活の安定をはかるうとしています。これは一般的には老後の設計といいますが、老年学ではあえて「老後生活に対処するための戦略 (*strategy*)」と呼んで、高齢者の自立を支える鍵として各地で調査、研究が行なわれています。

このような老後戦略の失敗例として、しばしば取り上げられるものにシェイクスピアの戯曲「リア王」があります。

古代ブリテンの国王リアは、年を取り、妻に先立たれたため、三人の娘とその婿に国土を分割して譲り、自分は娘たちの所を順

に回って扶養してもらい、楽隠居しようと考えました。そこで、ある日突然娘たちを呼んで、自分をどれだけ愛しているかという陳腐な愛情テストをします。しかしリア王は、上の二人の娘の口先だけの言葉にだまされて、三女コーデリアの父を想う本当の気持ちを見抜けず、これを勘当してしまい、ほんの少しの兵士を残して、全ての領土や財産を二人の娘とその婿たちにやってしまいます。あとの結果はご存知のとおりで、二人の娘に裏切られ、さんざんいじめられて追い出され、という狂い死にしています。

現代の老年学の側面から見ると、この話には多くの疑問点があります。

(1) リア王は、娘との扶養の約束をどうして契約として文書にしなかったのか？

(2) 何もかも与えてしまわずに、どうして一部を自分の隠居用に残さなかったのか？

リア王の力の背景は領土であり、城や兵士であるはずなのに、それを皆手放してしまつて、妻も嫁もない状況で、一体何を頼りに老後生活を送ろうとしたのでしょうか。

つまりリア王は、老後に対する準備をまったく何もせず、突然引退しようとして失敗するわけで、子供の道化にまでばかにされ、「かたつむりでさえ家をもっているのに何てことだ。何もかも娘たちにやってしまったのでは、あんたに残っているのは、生れつきある阿呆という肩書だけじゃないか」といわれる始末です。

老年学者の中には、シェイクスピアがこれを書いたのは、「こんなことをしたら失敗するぞという、全世界の老人たちへの警鐘なんだ」という人もいます。つまり、準備もなしに無計画にすべての資産を手放してしまうと、食べ物も寝るところさえ失いかねない、ということはこの戯曲は物語っていると考えられます。

どんな社会でも、高齢者たちは何らかの手段で自分の老後生活の安定をはかっており、豊かな老後人生を送るためにそれなりの作戦を立てています。とくに医療や年金などの社会保障制度がなかったり、あっても当てにならない社会では、さまざまな老後への戦略がみられます。老化に耐え、老後の生活保障を確保するために、世界の各地で高齢者たちはどのような手段を講じているのでしょうか。

1 頼るべき子供の確保

多くの社会で老後安定の第一条件は子供であると考えられています。したがって多くの頼れる子供をいかに確保するかが、ある意味では老後への準備の最大の課題となります。子供は多ければ多いほどよく、子供の数は親の老後の安定度と比例するとさえいわれます。その意味では、子供の数が少ない社会ほどそれに代わる公的な福祉制度が必要になります。

しかし子供は存在するからといって、自動的に親の面倒を見てくれるとは限りません。子供を親の方に引きつけ、老後の扶養、介護を確実にさせるための戦略が必要です。それは例えば、親子

契約のようなものであったり、親孝行などの価値観の注入、あるいは扶養を怠った子への超自然的制裁手段の存在であったりします。

例えば、ケニアのサミア族の老婆は、ときどき息子に自分のしなびた乳房を見せて、「このおっぱいでお前を育てたんだぞ。忘れたのか。この親不孝ものめが。」と親の有難みを思い出させているようです。

ソマリアの例によれば、ここはイスラム法の定めで土地や家畜は息子たちに平等に譲渡しなければなりません。しかし、土地や家畜の質は問われないので、いい息子―働きもので親をよく手伝う息子―には肥沃な土地と元気な牛を与え、悪い息子―怠け者で親不孝者―には生産性の低い土地ややせた牛を与えます。更にその上、一番いい土地は誰にも譲渡せずに、死ぬまで自分で管理して、いい息子に耕作させ、それを死後やることを約束することによって、老後の安定をはかっています。

2 配偶者の確保

夫婦の一方が老化しても、その配偶者が元気で介護能力があればそれに越したことはありません。そのためには普段から相手を大事にすることが大切ですが、不幸にして一人になった場合などにも、若く元気な配偶者を求めることで、老後の安定をはかる手段が各地で行なわれています。一夫多妻制の社会では高齢の男性が若い妻を迎えたり、中高年の未亡人が若い男の第二、第三の妻としてもらわれていくことも少なくありません。

アメリカでは、高齢の男性と若い女性の結婚は、しばしばMay-December marriage として表現されますが、これには若い男たちの嫉妬とねたみの気持ちが込められています。しかし、親子別居の社会ではこのような結婚も老後安定の一方法といえるでしょう。フィリピンからハワイに若い時に移住した男性たちが、高齢になって退職し、年金を貰うようになると、フィリピンの村に帰って、退職金で水田を買い、若い妻を娶る事例が報告されています。こうして老後のケアを確保すると共に、妻をとおして地域社会への適応をスムーズにしているのです。

3 生産手段や財貨のコントロール

リア王の失敗例を教訓とするまでもなく、土地、家畜、水、農機具、金などの主要な生産手段や価値ある財貨を次世代に譲らずに、自分でコントロールすることで権威を保ち、若者たちを服従させる方法が使われます。このような財貨を死ぬまで保持することも可能ですが、生存中に委譲する場合には、その継承、譲渡のタイミングと方法が熟考されねばなりません。

子供のうちの一人に譲るのか、何人かで競わせるのか。少しずつ小出しにするのか、一度に渡すのか。自分用に水田や家畜をどの程度残しておくか。死後委譲であれば遺言状の有無と内容も重要な戦略として使われます。遺言書を持々見せたり、扶養の状況によって内容を書き直すこともあるようです。

中世日本では、一旦譲渡した土地や財産を、親に孝を尽くさなかった、などの理由で取り戻すことができる「悔改くいかい」という制度

が法的に認められていたようです。

最近、日本でも遺言書を準備する人が増えているようですが、その背景として、遺産の配分をめぐるトラブルを避けたいという想いと共に、親のケアをした子供の相続分を多くするのは当然だ、とする考えがあるといえます。

4 社会的存在価値の保持

社会にとって有用な能力、余人をもって替えがたい知識や技術が高齢者が保持していれば、価値ある存在として処遇されることになります。病氣治療や皮なめし、出産助産などの技術、未来を予言する能力、あるいは話し上手であったり、人を笑わせるのがうまい老人などが含まれます。

また、文字のない社会では高齢者の記憶力に頼る場面が少なくありません。水害や旱魃などの過去の災害時に人々がどう対処したかを覚えていた老人、何十年に一度という儀礼のやり方を正確に記憶し伝えられる人、部族の歴史や神話を語りうる高齢者たちは、いずれもなくてはならない存在として厚く処遇されることでしょう。

次に、このような老後生活への戦略という観点から、本日の各報告内容を私なりに解釈してコメントに代えたいと思います。

大竹報告では、戦前までの日本には「家」制度と、老親に対する「孝」のイデオロギーという倫理観、価値観を保つことで子から親への扶養を確実にしようとする、いわば社会の側からの戦略が濃厚に見られた。それが戦後から今日に至る様々な社会情勢や

価値観の変化によって、親子共に老親の自助努力を期待する方向に変化してきた。そのような変化につれて、例えば資産を子供に残すよりも、自分たちの生活を第一に資産の活用を考える傾向が強まってきた。つまり親の戦略が変化してきたと考えられるでしょう。

高橋報告では現在の日本の出生率の低さが強調されました。多くの社会で親が子供の教育に力を入れることが、一つの老後戦略になっていきます。教育には大きなコストがかかるものの、子供はいい稼ぎ手となって親にお返しをすることができる。このような視点から出生率の低さをみると、子供をたくさん産んで教育にコストをつぎ込んでも、見返りをそれほど期待できないという、いわば戦略の転換がおこった結果と思えます。

メーワルト報告では、日本よりさらに高齢化が進行し、出生率も低いドイツの事例が述べられました。ここでは老後安定の一つの方策として、同居はしないものの、親子が近居することによって頻繁に接触し、内容的には拡家族的な関係をたもっていることがうかがえます。さらに報告内容と図表の数字からえた推測として、高齢者の結婚、同棲が日本よりずっと多く、子供がいない人ほど離婚率が高いのではないかと思えます。

家常報告では日本の現状として、高齢化、核家族化、出生率の低下、同居率の低下などから、今後ますます戦略としての公的福祉の重要性が指摘されました。さらに高齢者の一人暮らし、二人暮らしが増えるにつれて、親子関係を代替、補充するような、世

代と世代の交流が促進されねばならず、社会全体で高齢者をケアするという、新しい「孝」のイデオロギーの必要性が示唆されました。

最後に、今回のシンポジウムからえられた私なりの結論として、第一に老後を迎えるための準備が何よりも大切であること。その準備は早ければ早いほどよく、準備することの中心は健康であり、夫婦関係と親子関係であること。第二に、それらの準備を土台に様々な戦略を練り、自助努力を怠らないこと。第三に、そのような高齢者個々人の戦略なり老後設計がスムーズにいくように、国や自治体、地域社会も公的、社会的に支援していくこと。以上の三点を結びにしたいと思います。

波平 どうもありがとうございました。「高齢者の戦略」という大変刺激的な言葉がキーワードとして出て参りましてバツと目が覚めるような思いが致しました。それでは池田先生、よろしくお願い致します。